

浄土

monthly JODO

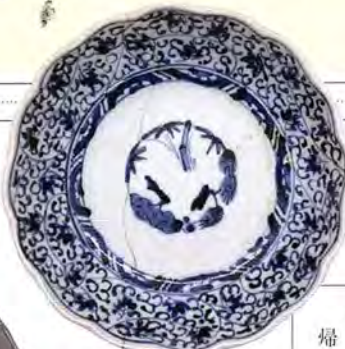
2020
November

11

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

貧乏骨董



高さ47mm、口径153mm、高台径95mm。上から下に二つに割れた傷跡がある。底に一か所、胴に一か所錆びたかすがいが残っている。左上の写真はその反対側の胴の部分のかすがいが抜け落ちた穴。



高さ45mm、口径147mm、高台径93mm。胴を一周する割れ跡と、そこから派生したヒビが二か所。かすがいは五か所に施されている。接合面にはほんのわずかなズレがある。

陶磁器の割れや欠け、ヒビなどの修復は金継ぎ（金繕い）がよく知られている。漆に小麦粉を混ぜ合わせて接着剤として使用し、そこに金粉などの金属粉を蒔いて装飾を施す修復技術である。安土桃山から江戸時代初期生まれとされる。上の写真は五年ほど前、東京・新井薬師寺の骨董市で見つけたなます皿である。段ボールの箱の中に無造作に入れられていた一枚だが、土筆の絵柄が面白いと取り出して底を見て驚いた。割れがホッチキスの針のような金属で止められている。店の親父にこれはなんですかと尋ねると、ああ、これな、江戸時代にはこういう修復の方法がこの国になかったから、まとめて中国に送って修繕してもらって、戻してもらってたんだと言う。江戸時代といえば、もう金継ぎの技法は誕生しているし、金属粉をつかわなくとも漆による接着はあったはずだ。手間ひまかけて中国に送って修繕してもらうなどということがあったのだろうか。

をたてて三百円ねとにっこり笑う。帰ってから調べるつもりだったが、ついほかのことに気をとられて忘れていた。今年の八月、所用で出かけた東京・吉祥寺の骨董屋の前のワゴンの中に、同じように金属の針で割れを止めた染付けのなます皿を見つけた。それが下の写真である。描かれた龍が面白くて手にとったのだが、「明治前期 かすがい継ぎ 500」のラベルが貼つてある。そうかこういう補修のやり方を「かすがい継ぎ」というのか。

調べてみるとかすがい継ぎとは、中国で生まれた陶磁器の修復技術である。割れ目の両側に浅い穴を彫り、比較の柔らかい金属のかすがいを少しづつ打ち込んでいく手技である。これで割れやヒビを止めるわけだが、もちろん接着剤も使われている。いや、修復には接着剤が中心で、金属のかすがいはどちらかというと装飾的な色彩が濃いようだ。

かすがい継ぎについては馬蝗絆と呼ばれる茶碗に次のような逸話が残っている。その茶碗は安元初（一一七五）年に平重盛が中国の仏照禪師から贈られたもので、その後室町時代の將軍足利義政が所持するところとなった。このとき、底にひび割れがあったため、これを中国に送ってこれに代わる茶碗を求めたところ、当時の中国にはこのような優れた青磁茶碗はすでになく、ひび割れをかすがいで止めて日本に送り返してきた。そのかすがいが大きな蝗のように見えることからこの茶碗の評価は一層高まり、馬蝗絆と名付けられた。

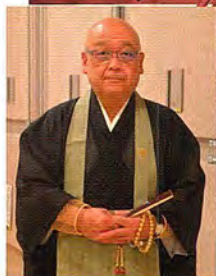
骨董屋の親父が言うことにも一理あったわけである。このなます皿が中国に送られて、補修されて戻ってきたのかどうかは怪しい話だが、親父の頭にはこの逸話があったのだろう。なんでも疑って話を聞くという態度は改めなければと思った。

東京・本郷駒込

浄心寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



湯島山常光院浄心寺本堂と第二十四世佐藤雅彦住職



浄心寺内陣と鎌倉時代の作と伝えられる本尊（左）。
本尊のほかにも多くの仏像が祀られている（下）



斎場、そして遺体安置のために平成15年に建てられた浄心寺会館さくらホール



8体のご遺体が安置できることから、檀信徒はもちろん地域住民や葬儀社にとっても活用しやすい遺体安置施設

参道左の浄心寺本郷さくら霊園。323基の墓があり、中には立川談志師匠の墓もある。



さくら霊園にある斎場。今はコロナ対策でソーシャルディスタンスが守られている





巨大木魚と釣り合わせた巨大な鐘



先代住職があつらえた浄心寺名物、日本一の巨大木魚。木魚を打つ、ばいを持つのもひと苦労



浄心寺第二十三世小池政雄住職の墓。参道脇に建っている



本堂下の客殿には先代住職が工夫して作った栈敷席が設えてある

浄土

2020/11月号 目次

カラーグラビア=寺院紀行 東京・本郷駒込 浄心寺	1
寺院紀行 東京・本郷駒込 浄心寺	真山剛 6
連載 寺々刻々⑤ 北方領土と増上寺	鶴飼秀徳 12
ぶつぶつ放談 お寺に必要な IT(第2回) ...	今岡達雄 青木 照憲 16
新企画 みんなの境内〈高德院 梅窓院〉	20
連載 インド紀行⑥ ガヤのビシュヌパダ寺院	佐藤良純 21
インド写真紀行④ ヒンドウ教の最高神	24
新企画 みんなの境内〈願成寺 光明寺 愚鈍院〉	25
微風吹動 真っ白な闇	石田一裕 26
連載小説 渡辺海旭⑩	前田和男 30
連載 江戸の川を歩く 総集編(前編)	森 清鑑 36
新企画 『浄土』揭示板	都築峰昭 41
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう 43
編集後記	44

表2 貧乏骨董

三宅政吉



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙写真=鬼海弘雄

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

寺院紀行

東京・本郷駒込

浄心寺

文・撮影／真山剛



本堂正面から見ると、布袋様の大きさがわかる

東京本郷と聞いて赤門を思い浮かべる方は少くないだろう。加賀前田家の屋敷跡に建てられた東京大学のシンボル・赤門は、江戸の面影を東京に残す貴重な建築物の代表格だ。その赤門前から本郷通りを北へ向かうと、右手に大きな布袋様が見えてくる。こちらは「有名」ではないが、一度その前を通れば必ず記憶に残る巨大な布袋様だ。インパクトは赤門にまさる。

その布袋様の足下には札所の石碑、参道を挟んで南側に浄土宗浄心寺と彫られたこれまた立派な寺号塔、駐車場と続いて「浄心寺本郷さくら霊園」の大きな立て看板。北側には「浄心寺会館さくらホール」の大本看板。さらに駐車場には横8メートルの長い看板が立っていて、通行人はもちろん、車に乗っている人も拾い読みできる大きさを各種案内が並んでいる。その案内を読んでみよう。

「本郷で、お参りできる。しあわせ」
「家族葬、どなたでも利用できます」

「いのちをつなぐお寺」

「江戸三十三観音札所・第十番」

「日本一の巨大木魚」

そして、看板の中心には「開創四百年 浄心寺」と書かれている。そう、今回は本郷駒込の浄心寺を訪れさせていただいた。

お寺離れが言われて久しい。人口が減る一方の地方寺院はもちろん、都会の寺院も人口減少はなくとも、寺離れは確実に進んでいる。葬儀の簡略化、年忌法要の切り上げ、寺院墓地からの改葬など、信仰心は変わらないとは思うのだが、お寺との縁をなるべく減らしたい人たちが間違いなく年々増えている。

編集部で話を聞くと、もちろん寺もただ手をこまねいて見ているだけではなく、葬儀会場を工夫し、各種お墓を取り揃え、コロナ禍ではリモートを駆使するなど、世の中の変化を押し止めようと努力しているという。そうした中、この浄心寺の訪問となったのである。

湯島山常光院浄心寺は、増上寺で学んだ還



布袋様の横には江戸観音札所十番の石塔が建っている

蓮社到誓文喬上人が開山となり、駿州（現在の静岡）赤坂に創建、元和二年（一六一六）に江戸の湯島に移転してきた。そう、徳川家康が江戸幕府を開いたことで、多くの人々やお店、そして寺院が移転してきた。浄心寺もその一つで、かつての別格の肩書を持つ寺院である。そして、元禄九年（一六九六）に現在地に移転した。上野の山から見ると向こうの山だったことから向丘と呼ばれ、布袋様の前のバス停は「向丘一丁目」。

さて、この浄心寺の第二十四世が佐藤雅彦住職。現在、浄土宗東京教区の教化団長を務め、本誌発行後の翌月には一期四年を終え、二期目に入る予定だという。また、大正大学非常勤講師、公益財団法人国際仏教興隆協会事務総長、日本生命倫理学会副代表も務められている。さらにボランティア活動として末期がん患者への「心のケア・ボランティア」や子どもにいのちや死について教える「いのちの授業」を積み重ねている。檀家数も決し

て少なくとも寺の住職でありながら、その行動範囲、活動内容は広く深く、そして長い。その佐藤住職に話を伺った。

「現代社会は様々なニーズが溢れ出てくる時代、従来の概念だけでは対応しきれません。寺として変えられないものを認識しつつ、そのニーズに応える時代だと思います」

なるほど、看板から想像されるように従来の檀家墓地の他に霊園墓地、会館ホール、大小の法要会場と葬儀場、そして霊安室。各種合同墓、もちろんペット墓もある。そしてこの中でも霊安室は浄心寺の立地の良さに加え、八体ものご遺体を安置することができ、檀信徒はもちろん、地元の人々、そして都内の葬儀屋さんにとっても貴重な施設だ。

次いで浄心寺のシンボルである大きな布袋様と日本一大きな木魚のことを聞いてみた。

「布袋様と木魚、先代である伯父が作ったものです。」

先代は満洲から無事帰還したものの、戦争

浄心寺本郷さくら霊園にある立川談志師匠の墓。自分でつけた戒名がユニークで引き受けるお寺がなかった



での傷から右足を根本から切断、一本足の和尚となりました。私から見ると『衆生縁の篤い人』で多くの檀信徒に慕われましたが、うーん、それは破天荒な和尚でした」取材した関係者も、先代住職の豪快さにはみな口を揃えていた。

どんな住職だったのだろう。

東大寄りにある「さくら霊園」、北にある「さくらホール」だが、以前は先代が創業したガソリンスタンドとホステスさんのいる沖縄料理を出すパブだった。そして、ガソリンスタンドでは、一本足の先代和尚が自ら白衣姿で店頭に立ち、相当の話題になったという。

また、この「寺院紀行」でも何度も紹介しているが、大本山増上寺の最大行事である御忌大会で唱導師を務められた時、行列に芸者さんが並んだそう。本堂再建時には客殿に棧敷席を作り、有名な相撲取りや芸能人、政治家などと懇親を深めたそう。そしてスペイン大使来寺を記念して境内のあちらこちらに植

樹した桜は、今は浄心寺のシンボルで、一見どこるか何度見ても飽きない桜の園だ。

こうしたエピソードを聞くと間違いなく破天荒な和尚さんだ。しかし、自分の住まいはというと参道脇に小屋を建てそこで生活し、沖縄のパブ店も先代代が沖縄で戦死したことから開いたそう。そして、大いに繁盛したガソリンスタンドのお陰で、巨大な布袋様や木魚をはじめ、将来の国宝なるようにと何体もの仏像を作った浄心寺の中興上人である。その先代住職の墓は歴代住職の墓とは別に、参道すぐ右手に建てられている。石碑には名物和尚への檀家の想いが綴られている。

さて、その法灯を引き継いだ佐藤住職、この住職の人生もまた特別だ。

子供の頃から病弱で小中高と体育の授業への出席はゼロ、そして今も障害者手帳を持たれている佐藤住職、現在六十二歳だが、その前半生は山と谷の連続だった。

先代の小池政雄前住職は6人兄弟の長子で、



本堂地下の客殿。取材時は書道教室用のしつらえとなっていた

末っ子になる三女が佐藤住職のご母堂。ご尊父は岐阜出身の実業家で、現在の紙のリサイクル事業の草分け的な仕事をしていたが、佐藤住職が十七歳の時に工場から出火。全財産を失った。これで佐藤住職は全日制の高校から定時制高校へ移るとともに、経済的困窮から伯父の弟子となり浄心寺に入ることとなる。

「小さい頃から病弱で、入退院を繰り返して、死がすぐ隣にあったからでしょうか、お寺に入ることに全く抵抗はありませんでした。

ただ、文章を書きたいという夢があり、某大学の文学部を受けたのですが、見事落ちました。ですが、それで吹っ切れ、大正大学で学問に専念できました」と振り返る。

大正大学では大学院まで進んだ。卒論は、「愛について」、「初期仏教の倫理」、「応用仏教学としての生命倫理」。学部、修士、博士課程で優秀な成績を修め、門主賞を受賞、自分の体験に基づく「病氣と念仏」と題した法話でも布教の特別賞を受賞した。そして三十

四歳で浄土宗から学費補助が受けられる浄土宗海外研究生となり、米国ワシントンのジョージタウン大学ケネディ倫理研究所へ留学。二年間、生命倫理を学ぶ。二十歳で大学に入ってから三十六歳まで学問一筋、これが佐藤住職の今につながる基盤だが、同時にこの学問一筋が住職への壁ともなった。

家庭の事情から浄心寺に住み込むこととなった佐藤住職だが、既にその時には子宝に恵まれなかった小池住職が、二人の甥を後継者候補として浄心寺に住み込ませていたのである。佐藤住職にとっては5歳上と10歳上の従兄弟になる。そうした環境の中で大学院進学、さらに海外留学である。先代小池住職ならずとも学問で身を立てる、と思うだろう。しかし、教授までの道のりは経済的にも大変で、多くの先輩や同僚も、お寺という基盤があるからこそ学者への道に進めるのだそうだ。

留学から帰国する直前に、一度寺を出た兄弟子が呼び戻され、浄心寺後継者として公表



無縁墓と合同墓。
この他にベツ用の墓もある

されていて、佐藤住職は仕方なくお寺から出る事となった。十七歳から世話になったお寺であり、所属寺院であることから、近くに住み、時々浄心寺を手伝うが、他のお寺の仕事を手伝い何とか生計を立てていたという。

そして十年後の平成十七年、先代住職が九十一歳で遷化される。公表されてはいたが従兄弟は後継者として確定していなかった。そこで通夜の夜に寺の親戚にあたる法類が集まり後継者の選定を行った。近隣の住職であり、法類の中でも総代だった西岸寺住職が佐藤師を後継者に推薦、長野の法類もそれを了承し、佐藤住職が第二十四世となった。

お寺では住職の肩書は大切で、住職だから就任できる役職が多いという。浄心寺所属から一転、住職となった佐藤住職は培ってきた学問や布教で大いに活躍し、東京教区教化団の団長となり四年が過ぎようとしている。

東京教区教化団とは、東京にある浄土宗寺院全438か寺の檀信徒へ、個別の寺院では

できない教化伝道を施策、実行していくための組織だ。

「浄土宗は大きな教団で、その中でも東京は注目される教区です。今回のコロナの影響を強く受けているのも東京です。」

浄心寺のさくら霊園にお墓を持っている人から「お寺の檀家なんかなるものじゃないわよ」と聞いたことがあります。こうしたお寺離れにコロナ禍が拍車をかけています。浄土宗に限らず仏教全体が寺院と僧侶のあり方を見直さなくてはいいけません。

私は自分の病の経験から幼い頃からのちを見つめ、長じては生命倫理という分野に身を置いてきました。そうした経験を活かしていくことこそ、私が宗教家になった意味があると、日々の活動に取り組んでいます」

コロナで死が身近になった今、死と隣り合わせで生きてきた佐藤住職。教化団からライフワークまで、佐藤住職の想いがさらに具現化されることになる。

(ルポライター)



子供にいのちの大切さを話す佐藤住職。
このボランティア活動は長く続けている

『寺院消滅』『教養としての仏教』著者

鶉飼秀徳の

寺々刻々

土領寺
と増上北方

択捉島の日本人墓地



7年8か月の長期に渡る安倍政権が終わり、新たに菅内閣が発足した。「仕事人内閣」とも評される菅政権には前政権の積み残し課題の決着をつけてもらいたいものだ。

外交面でいえば、喫緊の課題は北朝鮮拉致問題と日露平和条約の締結である。なぜなら、両方とも当事者が高齢化しているからだ。拉致被害者家族では今年、有本嘉代子さんと横田滋さんの2人が相次いで亡くなった。残った両親世代はわずかな人数を残すのみだ。

北方領土問題も安倍前首相が特に注力していた課題である。特にプーチン大統領とは27回、首脳会談を積み重ねた。

今秋、富山県内で北方領土の歴史などを紹介する施設がオープンするなど国や行政はその啓蒙活動が続けている。しかし「待ったなし」だ。北方領土の故郷を追われた元島民の平均年齢は85歳を超えている。

今年は新型コロナウイルスの感染拡大によって、元島民の故郷訪問事業「ビザなし交流」が中止に追い込まれており、元島民の落胆ぶりが目に浮かぶようである。私は拉致問題も北方領土問題も両方、取材してきた。特に雑誌記者だった時代に3度、ビザなし交流団員として入

択捉島にて。著者(右)と、島で
生まれたロシア人4世の女の子



択捉島。道路の舗装が進んでおらず、
砂埃を上げて車が走る

域している。

2012年に択捉島に赴いたのを最初に、国後島と色丹島を訪問する機会にも恵まれた。本稿では北方四島と浄土宗大本山増上寺との知られざる関係性について、その歴史とともにご紹介したいと思う。

もともとアイヌの地であった北方領土に、本格的に本土からの入植が始まったのが明治初期のこと。その際、寺院や神社が一緒にくつついていったとされている。寺院は村人の弔いをする一方で、神社は五穀豊穡などを祈る存在となっていく。

入植者のコミュニティの強化という機能を、寺社が担ったのである。この点、ブラジルやハワイなどの開教と同じ構造といえる。

実際、北方四島には多くの寺が建設された。浄土宗のほか浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、曹洞宗、日蓮宗など計24か寺が建立されたとの記録が残っている。こうした寺の存在は、故郷を離れた入植者の心の拠り所となったことだろう。

知られざる史実は、それだけではない。色丹島は芝の増上寺の寺領であった過去(1869〜70年)がある

国後島のロシア正教会



択捉島の博物館で展示されていた寺院の鐘

のだ。これは、明治初期に新政府が「分領支配」という手段で、地方の藩や有力寺院などに土地を分け与えて開墾させたことに由来する。ただ、時勢のタイミングが悪く、神仏分離政策などに伴う混乱で、2年ほどで上知（寺領の召し上げ）されている。

仮に今日まで増上寺が色丹島を保有していたならば、ロシア政府と浄土宗が独自交渉を進める、なんてことが生じたかも、と考えるのは飛躍が過ぎるだろうか。

私が北方領土を訪問した時、寺院の痕跡を探してみた。確認できたのは博物館に展示されていた梵鐘一つだけであつた。北方四島が占領されたのが1945年の終戦後。かつて1万7000人余りが暮らした日本人の営みを、戦後75年が経過したいま、かの地で感じ取ることは正直、難しかった。

北方四島の現在の景色は、完全に「異国」である。ロシア人の心の拠り所になっているロシア正教会の鐘の音が、ペンキでカラフルに塗られたロシア人集落に時折、響き渡る。終戦直後、ロシアが北方四島を占領した直後、すぐさま建設したのは教会であつた。宗教は人間活動の根本であり、国家は、この地を実効支配していることを

うかい・しゅうとく 1974年京都市生まれ。大学卒業後、新聞・雑誌記者を経て2018年にジャーナリストとして独立。「仏教界と社会との接点づくり」をテーマに活動を続ける。著書に「仏教抹殺（文春新書）」「ビジネスに活かす教養としての仏教（PHP研究所）」など多数。新刊に「仏具とノール賞 京都・島津製作所創業伝」（朝日新聞出版）。東京農業大学・佛教大学非常勤講師、一般社団法人「良いお寺研究会」代表理事。京都教区正覚寺副住職。

色丹島の日本人墓地で手を合わせる元島民



国際的に示すためにまず、宗教施設を建てるのだ。

それでも日本の痕跡を求めていると、集落の外れにゾクゾクするものを見つけた。日本人墓地である。林に埋もれてしまっている墓石もあるが、基本的にはきちんと管理されているように感じられる。

我々、ビザなし訪問団の最大の目的がこの墓参なのである。戦前の日本の建築物は無くなってしまうが、石でできた墓だけがこの地がかつて日本領であったことを訴える、唯一の名残りなのだ。ロシア側も、先祖のお墓参りをしたいと願う元島民に対する人道的見地から入域を認めている。

ビザなし交流事業が始まって以降、日本人墓地はロシア人が日本人に代わって整備してくれるようになるにもなった。近年は倒れた墓石をロシア人が立て直してくれているという話も聞く。

外交交渉上は対立が続く北方領土問題だが、民間のレベルではこうした温かい交流が続いているのも確かだ。その架け橋になってくれているのが、ご先祖様であると思えば、普段疎かになりがちな「お墓参り」も、より一層、深い意味を持つのではないだろうか。

浄土宗の青年僧侶に伝えたい

ぶつぶつ 放談

今月のぶつぶつ放談はコロナ禍で
広がるリモート社会の中、すでに
四半世紀にわたり寺院「HP」を
開設している僧侶に、その現状と
お寺に求められる「IT」を伺った。

お寺に必要な「IT」を考える 第2回

◆登場者◆

今岡 達雄

いまおか・たつゆう

1948年千葉県市川市生まれ。千葉・市川・善照寺住職。早稲田大学大学院理工学研究科卒業後、三菱総合研究所勤務。在職中にインターネット調査に携わる。1995年同研究所退職後、善照寺住職専業となり同寺のHP開設。現在、浄土宗総合研究所副所長。

青木 照憲

あおき・しょうけん

1948年熊本県熊本市生まれ。東京・目黒・西蓮社住職。日本大学理工学部建築学科卒、建設会社勤務後、西蓮社に。1997年同寺のHPを開設。また『浄土』創刊号からのPDF化とそのネット公開に携わる。地域の人向けのパソコン教室などを行っていた。

◆司会◆

服部 祐淳

はつとり・ゆうじゆん

1983年長野市生まれ。長野・青木島・安養寺副住職。今年3月まで浄土宗出版に勤務し、『浄土宗新聞』の編集に携っていた。

司会 さて、HPについては今岡住職はどうお考えでしょうか。

今岡 青木住職同様、HPは業務利用するには価値があると思います。お墓、納骨堂の募集や葬儀、法事の受付など。そういった業務の効率化、業務の拡大を図ることは有効です。ようするに企業がやっていることです。会社で有効とされていることはお寺でも有効になります。ただ、誰もがそうすればいいというわけではなく、業務拡大を意としているかで考えていただければと思います。「ネットの中に存在している」という意義ならそれ以上力を使う必要もないでしょう。別の教化方法に時間を使ったほうがいいのです。

もつと普及してほしいのが寺宝や所蔵文獻などのデジタルアーカイブ化です。自坊では『漢語燈録』（善照寺本）などをデジタル化して公開していますが、文化的に価値のあるものを公開することはとても意味がありますし、後世にも残る。文化的資産を持つ寺院としての義務でもあると思います。

司会 HPを公開している寺院数より、近年ではSNSのアカウントを持つ寺院または僧侶個人が増えていきます。

今岡 SNSにアップロードすることとは、寺院ないし個人の情報をさらすということ。お寺が行う日々の活動を日記の様に上げていくのも一つのやり方ですが、知られてほしくないところまで知られてしまうという危険性ははらみます。また、人間ですから不意な発言をしてしまうこともあり、それが人権問題に触れる恐れもある。SNSだと思つて気楽に書いてしまうと危ないでしょうね。特にこれまでバズって（SNSで上げた内容が話題になること）いるのはだいたいおちゃらけ系なのです。昔の言葉だけ（笑）。おちゃらけを表面に出すと「お坊さんなのに」っていう前提でウケるのだけど、アクセス数を増やすという目的だけでお坊さんがアップするということに対しては、それはやはり考えなくてはならない。

青木 僧侶を好意的にみてくれる人ばかりで

HP

ホーム ページ home page の頭文字をとったものでパソコンやスマホで見られる画面のこと。世界規模でつながる通信システム上のもので、企業、団体、個人が自由に作れ、広告や宣伝や作品公開や意見発表などに使われる。今や「詳しいことはHPをご覧ください」とHPは誰でも開ける前提となっている。

はないですからね。アカウントにお坊さんとして提示しているならその発言が社会的にどう受け止められるかは、一度立ち止まって考えたほうがいいと思います。

スタンス、アイデンティティがしっかりしていないと、安易に使えるだけに危険。お坊さんがこんな発言をしていたと拡散しやすいし、落とし穴がある。かえってマイナスプロモーションになります。

司会 メリットは？

青木 逆に言う和自己演出がしっかりしている人にとってはプラスな部分が何倍にもなっていて高い発信力を得ます。

今岡 お寺のこういう情報を出したい、その住職はこういう考えであるというビジョンを中長期的に考え、発信し続ければ効果は高いでしょうね。

あと、ネット上で演じられる人格ってありますからね。実際よりも素敵なバーチャル人格（笑）。Twitter、Facebook、Instagramなど用途によって人格も変わるでしょうから、

疲弊しないよう続けて発信することが大切です。

司会 お寺の「IT化」について、どこから手を付けてよいのか悩んでいる方も多いと思います。実務的なことでおすすめるはありますか？

今岡 檀家帳や過去帳などお寺で使う実務的なものはすべてデジタルデータ化しています。これは効率上がりますよ。

例えば自坊では寺報を発行していますが、郵送の手間はもちろん、誰向けにどのような内容にと振り分けることもできて、4日あれば300部は発送できます。

過去帳のデータ化は宗からはあまり推奨されていませんが、私が住職になった時に、明治以降の過去帳をすべてデータ化しました。お檀家さんに問われたときに、調べるのにとでも便利です。〇〇家の三代目の〇〇さんの子供だよとか。過去帳を検索していくとすぐわかる。

戒名もどういう理由でつけたかなどページ

SNS

ソーシャル ネットワーキング サービス social networking service の頭文字をとったもので、社会的ネットワークのこと。人と人のつながりを促進するもので、HP 同様、世界規模で人と人を通信でつなげるシステムのひとつ。不特定多数と共有、広げられのが特徴。

ライン、フェイスブック、インスタグラム、ツイッターなどの種類がある。

ごとに保存しています。紙の過去帳ともリンクさせて〇〇ページにその情報があるとしています。

司会 副住職の立場からすると寺院の様々な情報がデータで整理されていることはとても助かります。副住職の「悩みあるある」かも知れませんが、様々なお寺の情報って住職の頭の中にあるのですよね。まさにブラックボックス(笑)

今岡 住職の頭にしかない情報を「IT化」をテーマとして副住職、寺族とともに話し合い、データ化することは情報の共有という点でとてもいいですね。

データが蓄積、継承されることによって後にお檀家さんも知らないご先祖様のこと、いわゆるファミリーヒストリーを知ったうえでご回向ができる。法事の際などに伝えたらそれは喜ばれますよ。

青木 それは菩提寺の価値が上がりますよね。各家のヒストリーが蓄積されていけば、地域のお寺としての価値も上がる。

司会 「IT」を通じ会話をすることで、一律ではない、それぞれのお寺、ことの「IT化」が見えてきそうですね。

青木 コンピューターは便利です、一台あれば五人分くらいの仕事はしてくれるかもしれません。ただ、効率的にすればよいお寺、しなくてよいお寺もあると思います。寺院の規模、地域性、檀家数などそれは様々でしょう。案内のハガキだって手書きで一つひとつ丁寧な書くというのも継続できるならばそれは喜ばれることだと思います。

「IT」って何でもできそうな印象があるかもしれませんが、結局は情報をどう伝えるかの手段でしかない。その辺をわきまえないとね。何でもかんでも「IT化」すればいいわけでもないのです。どう使うか、よくよく話し合って各寺院で「IT」を導入していただければと思います。便利なことは便利なのですから。

アカウント

account のことで、コンピュータやネットワークに入るときの権利のこと。この権利はID(アイデンティフィケーション/identification)とも同義扱いはれる。この権利を使うときにその人であるという識別記号がPW(パスワード/pasword)で、いわば鍵のようなもの。

佐藤 孝雄

(鎌倉大仏殿高德院住職・慶應義塾大学文学部教授)

仏教とこれからの学術

遺跡から出土する動物遺体の調査・分析を専門とする動物考古学者の一人として、最終氷期以降の環境史を研究しています。シベリアや列島北部を主たるフィールドに、過去15年間、領域横断的な調査・共同研究プロジェクトも指揮してきました。その経験も踏まえ最近とみに感じますのは、自然と文化、動物と人を分かつ既存の研究の枠組みに囚われている限り、過去から現在に至るいかなる事象の理解もおぼつかないという点にほかなりません。ギリシャ哲学とキリスト教的世界観に根差す西洋近代科学を特徴づけるデカルト的な二分法や人間中心主義からの脱却は、これからの学術の課題と言えるでしょう。それだけに、万物照応の理を説き、対称性思考も育んできた仏教は、今後の学術の発展に重要な役割を果たすはずです。

みんなの 境内

リモート法要のQRコード

中島 真成 (東京・青山 梅窓院住職)

当院でもコロナウィルスの影響下、各大法要や諸行事に檀信徒の皆様が参列がかなわず、6月の開山忌法要からオンラインにて映像のライブ配信をし、大切な「祈りのとき」を画面越しながら共有していただいています。ですが、リアルタイムで当院ホームページを開き法要に参加するのは高齢者の多い檀信徒の皆様にとって若干の敷居の高さがあるかと。そこでもっとわかりやすく操作が簡単なQRコードに目を付けました。

コード付きお守り

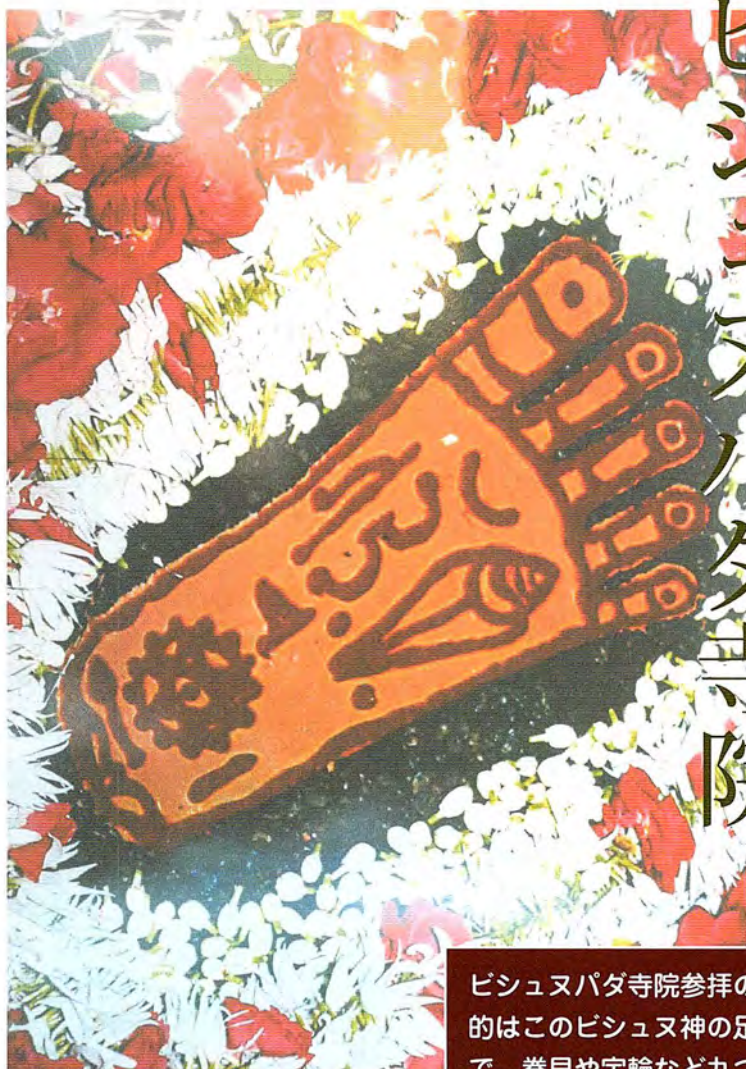


そして、いつでも手元にあって、パソコンやスマホですぐ開けるようにと、梅窓院のお守りの裏面にQRコードを印刷しました。ご希望の檀信徒の皆様も思いの外多く、喜んでいただいています。

インド渡航歴40回超！

佐藤良純の No. 6

インド・釈尊あれこれ紀行



ガヤの
ビシュ
ヌパ
ダ寺
院

ビシュヌパダ寺院参拝の目的はこのビシュヌ神の足跡で、巻貝や宝輪など九つの印が描かれている

昔、ガヤアシユラというデモン（日本ではデモンは悪魔と訳されるがここでは違う、しいて言えばヒンドゥー教の修行者）が長い間苦行の末、誰でも幸せにする力を手に入れた。それを知ったヒンドゥー教の最高神のひとりであるビシユヌ神は、彼に地球の底に行き右足で悪魔を踏みつけるよう命じた。ガヤアシユラはその命に従い、悪魔を踏みつけた。その足跡はビシユヌ神の足跡として地上に残ったとされる。その足跡が残っているのが、ガヤにあるビシユヌパダ寺院だ。

その足跡は、ビシユヌパダ寺院の一番大きな建物にあり、巻貝や宝輪など九つの印が描かれている足跡で、六角形で囲まれた床にあり、足跡の周りには多くの花が供えられている。全インドからのヒンドゥー教徒が多数訪れ、頭をそこに触れるようにしてお参りし、参拝者は昔から絶えることなく今も続いている。ちなみにこの寺院は複合寺院と呼ばれジャイナ教の寺院もある。複合寺院とは、異なっ



足跡は六角形に囲まれた床に残っている。参拝者はその足跡に自分の頭を触れようと体を乗り出す



ビシュヌパダ寺院のあるガヤはインド北東部のビハール州にある

た宗教の寺院が同じ敷地内にある寺院をいい、珍しい寺院である。これはヒンドゥー教には宗派がなく、他教に対する包容力もあるからこそのことだ。

この足跡の残るガヤという町にはガヤワラと呼ばれる人々がいる。彼らはビシュヌパダ寺院の参拝手配はもちろん、この町に巡礼に来るヒンドゥー教徒の色々な世話をすること、を生業としている。飛行機や汽車の手配、宿の確保、供養の儀式を行うヒンドゥー僧の手配、そして土産物まで用意する。世襲で何代も続いていて、ブッダガヤに参拝にくるヒンドゥー教徒にとっては欠かせない人たちだ。日本という御師である。



カラフルな服に身を包みビシュヌパダ寺院参拝に訪れたヒンドゥー教徒

佐藤良純

大正大学名誉教授

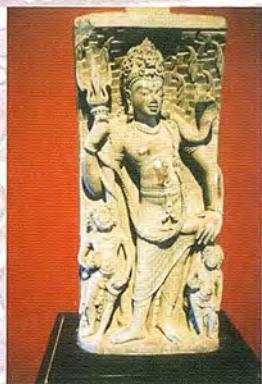
さとうりょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学、同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職。大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有余回。著書に『ブッダガヤ大菩提寺』、『釈尊の生涯』など多数。

写真で訪ねる インドと釈尊

④

ヒンドゥー教の最高神

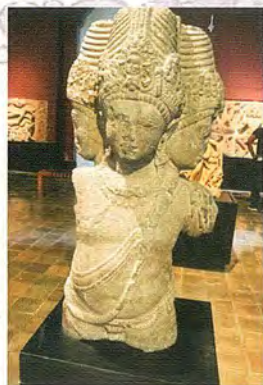
物事を創造する神であるブラフマー、それを維持するヴィシュヌ、物事を破壊するシバ。この三神をヒンドゥー教では最高神として崇拝している。この三神は本来一体とする思想もあり、これはヒンドゥー教の許容の精神を現すものだといわれている。



ヴィシュヌ



シバ



ブラフマー



佐藤良純師がインドで買い求めたヒンドゥー教の神々の木像のからシバ（左）、ヴィシュヌ（中）、ブラフマー（右）。いずれも光園寺蔵

相続

魚尾 孝久

(静岡・三島 願成寺住職)

法務を準備する部屋に、ふたつの日課数珠が掛かっている。ひとつは、師僧(父)が日常使用していた数珠である。旅立ちのとき、愛用の日課数珠を棺のなかに入れなかったことに多少の後悔がある。閻魔さんに「僧侶でありながら、日課数珠を持つてこなかったのか」と言われたのではなからうかと。お浄土は、入国にあたって、持ち物検査をするようなところではないと考え安堵した。

今ひとつの数珠は、書院の建て替えて柱から作った日課数珠である。わたしには大切な日課数珠である。このふたつを「お念仏の相続」として副住職息子に受け継いでもらう。

最後となったが、この『月刊浄土』もまた師僧父からの相続であるので、次の世代に、「相続は力なり」というから。

『対法雑誌』刊行のご紹介

石田 一裕

(神奈川・横浜 光明寺副住職)

本年3月、対法雑誌刊行会より研究誌『対法雑誌』が刊行されました。本誌は、部派仏教を研究する若手研究者の勉強会である部派仏教研究会のメンバーが中心となり、立ち上げたもので、部派仏教研究を中心に経典、律蔵、論蔵という典籍に関する研究成果を幅広く掲載するものです。7月には、電子ジャーナルのプラットフォームであるJ・STAGEにも掲載され、その成果はインターネットを通じて、今後、広く世界へ向けて発信されていきます。

みんなの
境内

中村 瑞貴

(宮城・仙台 愚鈍院住職)

あの日のことは忘れない……。自然災害が日本のいたるところで起き、新型コロナウイルス感染症が全国を揺るがしています。東京五輪が開催されるはずだった今夏、東北、特に岩手・宮城・福島に住む者は一つの節目を経験しました。東日本大震災でお亡くなりになられた方々の10回目のお盆を迎えたことです。

毎月11日の月命日には県警をはじめとするボランティアの方々によって、いまだに行方不明者(2529人)の捜索が沿岸部で行われています。また、身元不明者の慰霊も宗教者有志が続けられています。私も宗教者の一人として、仙台市の身元不明者の供養を毎月行っております。身元が判明して、無事に家族のもとにお帰りになるまで供養し続けることが私の使命だと思っております。

10回目のお盆

合掌

石田 一 裕



微

風

吹

動

真つ白な闇

タンポポや会津藩士の墓はここ

(岡崎古艸)

人が視界を失うのは真つ暗闇だけではない。一寸先の真つ白な闇というものがある。

北海道稚内市、最北端の街の冬は最高気温が氷点下になる日が続き、粉雪が風速二十メートルを超える風に乗って、全てを白く染め上げる。そんな猛吹雪の光景が、ホワイトアウトといわれることを知ったのは大人になってからのことである。遮るもののない海からの風が人々の住む丘に容赦なく吹き付け、特に真冬の風は凍てつく風だ。小学生の頃、冬場の登校はスキューエアを着て家を出て、学校に到着するわずか十分の間にまっげが凍りついたものだ。

稚内市の北端、宗谷岬には「日本最北端の地」という碑が建っている。晴天の日には、その碑の向こうに樺太を眺めることもできる。この日本の北端には、十九世紀初頭、幕府直轄領となり、外国からの防衛を目的として津軽藩や会津藩などの藩士たちが派遣された。

現在の風雪に耐える家であっても、暖房がなければ室内で水が氷になる。この寒さは江戸末期の粗末な家で耐えしのぐことが難しかった。派遣された大勢の藩士たちが冬を越すことなく生涯を終えた。余談だが、この後、北方警備に当たった藩士の間では野菜不足を補う薬としてコーヒーが飲まれたそうで、藩士を供養する墓の近くには、それを記念するコーヒー豆の碑が建てられている。

さて、亡くなった藩士の墓は、死してなお海からくる脅威を見張るためか、海岸沿いに建てられた。時代が明治になり、外国に門戸を開いたためだろう、海岸線に散在していた墓がまとめられ、今は宗谷公園という公園の一角に並んでいる。

幼い頃、普通の墓とは違い、柵の向こう側にある古びた墓石を見て、これは一体何なのだろうと思ったことがある。まさか、それが外国からの脅威を守るために命を落とした人々を弔うものとは知るよしもなかった。安政三年（一八五六）、宗谷という地に建てられた護国寺という寺は、その藩士の供養を行う寺である。そして、日本の北端の死者供養を担い、海を越えて樺太にまで出向いて葬儀を行った。

「葬式仏教」という言葉は、今の仏教のあり方を批判するものとして用いられることもあるが、明治時代、風と人の力でしか動かない船で海を渡る行為は、命がけのものであっただろう。そうまでして死者を弔ってきた仏教は、僧侶が葬式を使命とし受け止め、全力でその使命を遂行した仏教であった。

この情熱は、明治以降、日本の最北に息づいてきた。人の住まいや着るもの、あるいは移動の手段は時とともに変化するが、自然はいつまでも変わらぬ厳しさを見せつけるものである。

青森で生まれ、満州に出兵した私の祖父は、戦中にこの寺の住職となった。祖父は、毎月毎月、檀信徒の家に月参りに赴いた。雨が降っても、風が吹いても、吹雪であっても、家を出て歩いて檀信徒の家に向かう。おそらくお参りの滞在時間よりも、往復の移動時間の方が長かったはずである。真冬の月参りの時には、真っ白な闇に包まれたこともあっただろう。それでも歩き続けた。

私には、その情熱がどこから湧いてきたのかはわからない。もしかしたら、それはその寺の住職が先人から引き継ぐ使命なのかもしれない。衣鉢を継ぐというが、お寺に伝わるものや伽藍とともに、受け継がれる何かが確かにあるということ、祖父は体現していた。強い思いは形となり、その形を通じて思いは伝わっていく。供養したいという思いは、人を突き動かすエネルギーである。そして、供養を通じて、人は導かれていく。

ホワイトアウトの真っ白な闇の中であっても、供養に対する使命感は自分を突き動かし、供養によってまた自分自身の行き先が見えてくる。亡き人のために唱えし念仏は生きる我が身の教えなり、という言葉や聞くが、祖父の歩みも、供養を通じて導かれたものであった。冬の訪れが、師走に亡くなった祖父との記憶を浮かび上がらせる。どうかこの記憶が私を導いてくれますように。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二二回

第三部

充実と総りの白秋へ

浪沢俊一との随にみちた親交 その十



世界恐慌が困窮者に、とどめの一撃

インドの詩聖タゴールの最後の来日となった昭和四（一九二九）年初夏の某日、渡辺海旭は、渋沢栄一とビハリ・ボースと共にタゴールを囲んで歓談の時をもったが、そこで渋沢が表情を曇らせて漏らした次の言葉が、その後海旭の心中で気がかりでならなかった。「ここに、とどめの一撃」がきたら日本は大変なことになる」

それからわずか数か月で、渋沢の不吉な予言は的中することになった。

アメリカ東海岸時間で一九二九年十月二十四日火曜日、ニューヨークはウォール街の株式市場を空前絶後の大暴落——「ブラック・チューズデー」が襲ったのである。それは忽ち世界中に波及、大恐慌を引き起こした。

日本でも被害は深甚で、困窮者には渋沢の予言どおり「とどめの一撃」となった。

というのも、首相の浜口雄幸が第一次世界

大戦後からつづく不況を乗り切るべく断行した「金解禁」と時が重なったからだ。ニューヨークの株式大暴落という不測事さえなければ、財政緊縮政策への大転換は「英断」であり「正解」だったかもしれない。だが、あまりにもタイミングが悪すぎた。譬えるならば、暴風雨が襲ってくるとも知らずに、空気を入れ替えようと雨戸をあけてしまったのである。歴史の常だが大災厄の最大の被害者は底辺の人々である。

これで先進諸国に遅れてようやく成立した救貧法である「救護法」は、予算がつかず棚ざらしになってしまった。まさに渋沢が危惧した、仏つくつて魂いれずであるが、そのときの渋沢の行動は実に果敢であった。

現在の民生委員にあたる方面員たちから「なんとか法律に予算をつけてほしい」との懇願を受けた渋沢はすでに九十を超え、しかも病床に伏しがちだった。しかし、その場で蔵相の井上準之助と内相の安達謙蔵に電話を入

れると会見を申し入れた。両大臣は渋沢邸へ伺うと答えたが、渋沢は「頼み事をする側が出向くのが筋だ」と言うと、引き止める家族や医師に、「先生に診てもらっているのはこういう時のためだ。倒れてもたくさんの人が助かるなら本望だ」と言い残して、大臣のもとへ陳情に出向いたのである。かくして老体に鞭打った談判が実って、念願の予算がつき救護法は施行されることになったが、渋沢榮一はそれを見ることなくこの世を去っていた。救護法という仏に死の際に魂を入れた渋沢に、海旭は同じ救貧活動に関わる人間として深い感動をおぼえると共に、年下の自分への「後は君に託した。いま最も底辺にある人々を救えないとこの国はとんでもないことになる」というメッセージを感じたのではないか。すでに海旭の尽力で宗門の宗務所には「社会課」が設けられ、各教区に向けて社会事業協会の設置を奨励、「一寺院一事業」の合言葉のもと託児所や隣保事業（後のセツルメン

ト）が生まれ、その数は百五十を超えようとしていた。浄土宗が「社会事業宗」と言われるまでになったのもこの時期であり、社会事業家として渋沢の衣鉢を継がんとする海旭の意気込みをそこにみてとれよう。

女子教育に先駆的に取り組む

実はもうひとつ、海旭が渋沢の衣鉢を継がんとし、そこにタゴールが介在したと思われる活動がある。それは、九十余年前の日本では、ほとんど等閑視されていた女子教育である。

渋沢は、救護法という仏に魂を入れた年の四月に、日本の女子高等教育の草分けである日本女子大学校（日本女子大の前身）の校長に就任している。その背景には、タゴールが来日のたびに同校で行なった講演に共感を覚えたことがあったと推察される。ちなみに渋沢はその感想をこう記している。

「（タゴール）翁は、日本の女子に対する教育の必要を説き、社会の進歩につれ益々その

必要あることを訓戒的に説かれた、尤もな説のやうに思つた」

『洪沢栄一伝記資料』によれば、洪沢は生涯で百六十四校にもおよぶ教育機関を支援しているが、うち実業系が四十八なのは「日本資本主義の父」としてうなずけるが、女子教育機関が二十七もあるのは当時としては画期的といえよう。

一方の海旭はどうか。宗教大学（現大正大学）、東洋大学、国士館の教授と母校芝中学の校長の傍ら、大乘女子学院（淑徳大の前身）、巢鴨家政女子学院、巢鴨女子商業の院長・校長をつとめている。洪沢の場合はほとんどが資金援助であるのに対して海旭は現場で教鞭をとり、しかもそのうち三校が女子教育であつたことは、洪沢を超えているといつてもいいのではないか。

海旭が洪沢の衣鉢を継がんとした活動はまだまだある。たとえば、社会に資する宗教である。すでに記したが、洪沢は、「三教会同」

「婦一協会」によつて仏教・キリスト教・神道の親和をめざし、海旭は「仏教護国団」の結成をもつて仏教各派の連携を企図して、いずれも道半ばにあつた。

社会事業にしろ、女子教育にしろ、宗教の社会化にしろ、海旭は、洪沢の死を「後は君に託した」と受け止め、それぞれの活動に大いに意気込んだのではないか。

しかし、おそらく当人にとつても想定外だつたと思われるが、それは突然、頓挫を余儀なくされることになる。

渡辺海旭、遷化する

洪沢が逝つてからほぼ一年後の、昭和七（一九三二）年の年の瀬の二十七日の夕刻、渡辺海旭は突然の高熱と悪寒に襲われ、文机に昨夜来の文献を読みさしにしたまま、床に臥した。流行性感冒に罹（か）つたものと思われ、いっこうに熱が下がらずに年を越した。しかし、年が改まった早朝の四時半、海旭はむくりと

床から身を起すと、例年の元旦と同じように、寒中の井戸水で身体を清め、下着を改め、袈裟・法服に着替えて、仏前に詣で読経すること二時間余り、厳肅に新生の勤めを行なった。

火の気がない本堂の寒気は骨も凍るばかりで、病身にはこたえた。発熱のため意識はもうろうとしかけていたが、悪寒を気力で押し込め、海旭はフロックコートに着替えはじめた。深川御船蔵町の西光寺から、校長をつとめる芝中学校の「新正の式」に列するためであった。これを知って、弟子たちは慌てふためき、必死になって止めにかかった。

だが海旭はこう言って聞こうとしなかった。「い、今こうして僧侶として新生のお勤めを果たし終えた。次は、芝中学の新生の式を校長として主宰するのが僕のつとめだ。校長が新正の式に欠席しては式をしないのも同然だろう。一千名の生徒が待っている。ほ、僕は校長に就任して二十二年このかた、一度も新正の式を休んだことはない。流感など恐れて

どうする。だ、だから行かせてくれたまえ」一年前洪沢栄一が家族と医師が引き止めるのも聞かず、大蔵と内務両大臣の許へ談判に赴いたことを彷彿させるものがあつた。

海旭は高熱の身体を法服に包んで芝は増上寺の傍らにある芝中学へ赴くと、新正の式が終了するまで、校長として講堂正面の壇上に立ち続けた。しかし、海旭の類い稀れな胆力にも限界があつた。式が終わると同時に、ついに耐え切れなくなつて、海旭はその場に倒れこみ、声をかけても、わけのわからぬうわごとを発するばかりであつた。

西光寺に運ばれた海旭は、高熱にうなされつづけたが、かけつけた主治医の長谷川基博士の献身的な治療のかいあって、ようやく快方に向かい、一月十五日には、小康を得て、床から起きて食事をとれるまでになった。すると、弟子たちが止めるのもきかず、いつものように四時半起床の戒律僧の一日がはじまった。そして、海旭は夜の書見の時間を盗

んで、芝中学生に書簡をしたためた。

その後容体が急変、床に臥すも再び起きることは叶わず、これが事実上の絶筆となった。

まさかいきなり人生が終りを迎えるとは、海旭も思っていなかったのではないか。

それは、芝中学生への書簡の以下のくだりからも明らかであろう。

「拙生病状は今や殆んど快癒の状態に在り。

(略)主治医も尚四五日の臥床を必要とするを以て諸君を見るの期間尚旬日を要するあらん。諸君願くば自重自励せよ」

それは、往時海旭が引き受けていた以下の役職からも明らかである。

社会事業では、中央社会事業協会、浄土宗労働共済会副会長、マハヤナ学園監督、四恩瓜生会評議員、慈光学園顧問、上宮教会理事、大阪四恩学園顧問、少年信愛会名誉会長、仏教少年連合団団長、全日本私設社会事業連盟、日本禁酒同盟理事、借地借家調停委員他。

教育関係では、宗教大学教授・理事、東洋

大学教授・財団維持委員、芝中学校長、深川商業校長、大乘女子学院院长、巢鴨家政女子学院院长、巢鴨女子商業校長、大阪上宮中学理事長、国士館大学教授・評議員他。

宗門関係では、東京仏教護国団理事、中央仏教会理事、日本宗教協会理事、日独仏教協会理事、東京仏教倶楽部理事、仏教研究所所長。その他では日印協会理事。

まさに最先端の現役として走りながらの「途上の死」であった。なすべきことをなして、九十二歳の天寿を全うした渋沢栄一とは真逆であった。

かくして本連載は、前触れもなく突然の終わりを迎えることになるが、何卒読者諸賢には主人公自身の想定外の死に免じて、ご寛恕をいただきたい。

次回は最終回として、渡辺海旭の多岐にわたる業績を総括することで、師への手向けとしつつ、読者には百回を超える長きにわたるご愛読に謝意を表したいと思う。(つづく)

江戸の川 を歩く

1. 江戸の舟運しゅううん路開発

〈家康の大都市設計と舟運〉

家康が一五九〇（天正十八）年、太田道灌が造った小規模な江戸城に立って周囲を見渡した時、背後は武蔵野台地、神田台地、上野台地が織りなし、眼前は海（日比谷入り江）。その向こうには、細長い島（江戸前島）が飛びだしており、その先はほとんど湿地帯で、海が迫っている状況であった。家康は啞然としたに相違ない。しかし彼は普通の人ではなかった。周囲を歩き調査し、日本の中核

総集編・前編

江戸ウォーカー

森清鑑

にして江戸百万都市を構築するという大構想を抱く。それは広大な江戸城郭を中心に、類を見ない規模の舟運路を張り巡らせた大都市構想である。川や海を利用した舟運による運搬量は、陸上の牛や馬による運搬量とは桁違いに大きく合理的である。したがって舟運路の構築は、大都市建設の絶対条件であると彼は見抜いていたのである。

当時、江戸の中核部分に流れ込んでいた川はどのような状況であったのか。まず眼前の日比谷入り江に平川と小石川が流れ込んでいる。東に行くしぎと石神井川が上野台地を巡って江戸湾に注ぎ込ん

でいる。そして主役の入間川が州を作って江戸湾に流れ込んでいる（隅田川）。そのずつと先には利根川と渡良瀬川が並んで江戸湾に。古江戸城から南を見ると、古川、目黒川、立会川が江戸湾に流れ込み、出口は大きな入り江になっている。特に古川の入り江は大きい。そしてその遙か先に多摩川が大きな州を作って流入している。

〈大規模な埋め立て〉

まず、人が住める土地を造り出すことである。周囲の山を削り、海に向かって埋め立てによる広大な土地の確保と建設が始まる。最初に日比谷入り江を埋め立て、次に江戸前島東の江戸湾埋め立てに入る。最終的には隅田川沿いの靈巖島まで埋め立てる。隅田川を渡ると本所、深川の湿地帯。それも深川の大部分は水没湿地帯。さらに江戸湾に向かって埋め立てて、結果、沖の百万坪といわれる広大な深川という土地が誕生する。

〈物資運搬の中核…日本橋川の掘削〉

江戸建設と舟運路建設が同時進行で行われているのが江戸普請の特徴である。まず、江戸前島の

北側に道三堀を掘る。城から見ると真ん前である。次いで隅田川に繋がる日本橋川を掘削する。これで城の建設資材を海と隅田川河口から直接現場に持ち込める舟運ルートが出来上がる。そしてこの日本橋川を軸に江戸の町が発展していく。雪旦が「江戸名所図会」で描く日本橋川の光景を見ると、物資を運ぶ舟で身動きがとれない様が伺える。

〈大外堀と重要な船運路…神田川の掘削〉

神田川の開削は、広大な江戸城を取り巻く大外堀として、また物資運搬の舟運路として計画された。神田川は井の頭池に端を発し、善福寺川を加え江戸に入る。この流れを隅田川まで横一直線に掘削するのである。北から日比谷入り江に流れ込んでいた平川、小石川を神田川に落とし、神田山を割って東へ掘削。北からの石神井川の流れも吸収し、大きな流れとなって隅田川に出る（柳橋）。神田川の開削は度々氾濫を起こした平川、小石川、石神井川の治水対策でもあった。次に神田川、飯田橋辺りから江戸城西側の外堀が掘削されていく。

〈江戸城東湾岸の埋め立てと舟運路開発〉

そして神田川和泉橋付近から隅田川河口に向かつて浜町川を掘削。途中、江戸城に向かつて龍閑川を引く。これらは重要な運搬ルートになる。次いで日本橋川から汐留にいたる江戸湾沿いの東面を海に向かつて埋め立てる。日本橋川から汐留までの縦の舟運路、楓川、三十間堀川を開削。このラインが当時の海岸線であった。その先を埋め立てていって、楓川、三十間堀川を造っている。最初から緻密な舟運路の絵図面が織り込まれている工事の仕方である。三十間堀川の終点は汐留。すなわち溜池から汐留までの汐留川を外堀となし、汐留で三十間堀川に繋がっているわけである。これから先の海に向かつての埋め立て地は水路で仕切られたブロック地形として形成していく。例えば浜御殿。周囲は水路で囲まれている。こうしてブロック地形（地区）ごとに大名の下屋敷、築地本願寺、靈巖寺といった具合に割り当てがなされていく。亀島川はこのブロック間を縫う大きな流れである。京橋川は江戸の中核から海へと繋

がっている。すなわち、物資運搬の舟が自由に海から入れる構造である。そして全体を俯瞰すると、堀や運河は江戸城の城郭を幾重にも取り巻いているのである。このように江戸の都市造りは、舟運路を軸に設計されているのである。

この後、広大な江戸城を囲む、「の」の字の形で身内の家臣団から順に屋敷が建設されていく。そして、その周囲に職種ごとに町人町ができていく。こうして当時、世界でもまれなる舟運路に囲まれた合理的な大都市が誕生していくのである。

〈塩の舟運：小名木川の掘削〉

全国から江戸へ人々が集まってくる。城建設の前に家康は塩の導入運搬ルートに着手する。当時、塩はなくてはならぬ貴重な品。幸い行徳は全国有数の塩の名産地。この塩を安定的に持ち込む船運ルートに着手した。湿地帯となっている陸上ルートでは輸送は困難。そして江戸湾伝いの海ルートは埋め立てが進行中の上、波の影響もある。そこで深川の海岸線内側に東へ運河を掘削、これが小名木川である。東へどんどん掘削すると利根川（後

の中川)にぶつかる。利根川を横切りさらに新川堀を掘削。すると、渡良瀬川(後の江戸川)の流れに出る。これを横切れば行徳である。家康は塩の増産に力を入れる。そしてこのルートは塩だけでなく、野菜、穀物の搬送にも貢献した。小名木川は江戸最初の食品流通舟運ルートなのである。

〈本所、深川の舟運路〉

埋め立てにより新たに造りだされた広大な本所、深川地区にも、極めて計画的な縦横碁盤の目のような舟運路が完成する。横に北割下水、南割下水、堅川、小名木川、十間川、大島川、木場。縦に大横川、横十間川（江戸城に向かって横に流れているため）。全ての川は隅田川から水を引き入れ、中川とも繋がっている。景観的にもまさに東洋のヴェニスと形容された水の都の完成である。そしてこの舟運路が本所、深川の発展を促進したのである。

結果、江戸城を囲んで張り巡らされた、主な舟運路を示したのが図1である。

図1 江戸城を囲む舟運路



文書伝道

腹が立つ時　ブツブツ申せ

ブツはブツでも　なむあみだ仏

都築峰昭

東京・高砂　大秀寺副住職

根川の東遷、荒川の西遷という大事業が計画された。家康は責任担当者に伊奈忠次を抜擢する。信長が本能寺で討たれた後、伊賀越えて脱出する家康を助けた腹心の部下である。そして既にこの時から、家康は川の治水、土木工事に長けた彼の才能を見抜いていたのである。家康は忠次に利根川沿いに任地（今の埼玉県北足立郡伊奈町、鴻巣）を与え、治水奉行も併せ持った関東代官頭に任命する。

〈利根川の東遷事業〉

江戸湾に流れ込んでいる利根川を銚子に向かわせる東遷。具体的には江戸に向かう流路を遮断し、銚子に流れ込んでいる常陸川に繋げ拡張する。並行して江戸湾に入っている渡良瀬川を新利根川が受け止める。また、鬼怒川、小貝川の流れをまっ

すぐ下（南）に変え、これも横一線の利根川に直結させる。結果、水量豊富な渡良瀬川、鬼怒川、小貝川が揃って北から利根川に入ることになる。また霞ヶ浦南からの常陸川の流れを銚子の手前で利根川に繋げる。これによって、北からの物資を霞ヶ浦、利根川経由で江戸に送ることが可能となる。そして最も重要な工事、利根川の水を関宿から江戸湾に向かわせる新たな分流を造る。これが江戸川である（元渡良瀬川跡を利用）。江戸川は文字通り、江戸への物資船運の主航路である。こうして関東の物資は全て利根川経由で江戸に運ばれる舟運路が完成する。関東の物資は渡良瀬川、鬼怒川、小貝川、霞ヶ浦を下って利根川に入り、江戸川経由で江戸に到達する。さらに東北からの物資を開発

された東航路經由で銚子まで下り、銚子湊から利根川に入り、江戸川經由で輸送することが可能になった（銚子から房総沖經由は黒潮と親潮がぶつかる危険ゾーンのため）。

〈中川の舟運〉

利根川の東遷後、江戸への流れは遮断され、川跡のみ残った（古利根川）。しかし、途中からは元荒川や綾瀬川が流れ込み大いなる流れとなつて江戸湾に注いでいる。そこで江戸湾に入る隅田川、江戸川の間位置していることから、元の利根川の川路を中川と呼ぶようになった。そして將軍吉宗の時、東遷された利根川が氾濫を起こし、旧河床に流れ込み、被害を起こすことがあったため（古利根川の悪水落とし）、吉宗は綾瀬川合流点までの流路を造る工事を一七二九（享保十四）年、井沢為永に命じた。散在していた池や沼をつなぎ合わせ、蛇行する流れとなったが、川幅は拡張され氾濫を防ぐことができた。ともかく中川、綾瀬川經由の舟運は大いに栄えた。広重の中川番所の絵には、木材の筏乗り運搬の姿が描かれている。

〈荒川の西遷〉

一方、かつて旧利根川に接続していた大河川の荒川は、熊谷市久下で締め切られ江戸湾に向かつて南下。和田吉野川、市野川を吸収し、さらに西から流れてくる人間川を加え、最後は隅田川となつて江戸湾に落とされる。これが荒川の西遷である。この付け替え工事は一六二九（寛永六）年に開始されている。埼玉県東部の新田開発や荒川を利用した舟運によつて集まる物資も江戸を百万都市に押し上げることになる。工事責任者は伊奈忠次の子、伊奈忠治である。

利根川の東遷工事は一五九四（文禄三）年に始まり、一六六五（寛文五）年まで約七十年の歳月を費やすことになる。伊奈忠次に始まり、その子忠治、孫の忠克と、親子三代に渡る大工事であった。伊奈家は代々関東代官頭を引き継ぎ、この大変な工事をやり遂げた。まさに神様の存在である。こうして、百万都市江戸を醸成する物資運搬の主要舟運路が整えられていったのである。

（後編につづく）

さっちゃんね

175

かい目

かまちのひろう



かまちのひろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)

編集後記

今月号より「みんなの境内」と「浄土掲載」二つのコンパクトな新企画が登場。

「みんなの境内」はいわゆる会員のページ。当会は会員の支援で成り立っています。その大事な会員の皆様からの情報やお声をお聞かせいただく企画です。もちろん初回は狙い打ち、電話や直接お会いしてお願した方々にご登場いただきました。北海道から沖縄までの読者を持つ本誌です。会員の皆様からのお便りをお待ちしています。

「浄土掲載」の初回は「浄土掲載」道詠（仏の教えを説く和歌）やお寺の行事に合わせた俳句も掲載していきます。前編集長もこの後記を俳句で始めています。

した。こちらも皆様の投句をお待ちしています。

今月の巻頭は寺院紀行。この寺院紀行、第一回は平成11年の新年号で仙台の定義如来こと西方寺さんを訪れています。今回で120か寺目となりました。世間同様、寺の世界も隣のお寺なので挨拶や行事で行き来はするものの、意外と知らないことばかり、ということが多いようです。この寺院紀行、色々な切り口でそのお寺や住職を紹介していきますので、お楽しみに下さい。

今月登場いただいたのは本郷駒込の浄心寺。二代にわたり個性的、活動的な住職の寺です。

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 加藤昌康(下北沢・森厳寺)
 糸原恒久(川越・蓮馨寺)
 糸原勇慈(甲府・瑞泉寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤久雄(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 河本悠大(函館・称名寺)
 高口恭典(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 成田昌憲(世田谷・大吉寺)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多将敏(両国・回向院)
 松濤泰彦(芝・寶松院)
 水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ jodo.ne.jp/

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

カメラマンの鬼海弘雄氏が10月19日、75歳で逝去された。氏ならではの魅力的な写真で通算60回、6年にわたり本誌の表紙を飾っていた。謹んで哀悼の意を表わしたい。(村田)

編集部長 編集委員

村田洋一
 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 平井泰代子
 本原亮道

浄土

八十六巻 十一月号 頒価六百円
 年費六千円

昭和十一年五月二十日第三種郵便物認可
 印刷 令和二年十月二十日
 発行 令和二年十一月一日

発行人

佐藤良純

編集人

長谷川岱潤

印刷所

株式会社 暁印刷

〒105-0011

東京都港区芝公園四丁目四番四路

発行所

法然上人鑽仰会

電話

03-5781-6947

FAX

03-5781-7366

振替

00180-888888

写仏、写経、写詠歌のご案内

- 1 A4版の奉書の手本に筆ペンで直接なぞります。
- 2 写仏の仏画は仏師（前田昌宏師）のオリジナル。
- 3 写経は浄土宗日常勤行式です。
- 4 写詠歌は法然上人四季の和歌と宗歌「月かげ」他。



申し込み日 年 月 日

お名前 個人

寺院 教区 組 寺・院 寺院番号

お電話

ご住所 〒

写仏(6枚1組入り) 頒価:2,000円 セット

※ 3 組 5,000円、10組18,000円他割引があります。

写経(12枚5組入り) 頒価:6,000円 セット

※寺院名 () 入れる(無料) 寺院名 () 入れない

※三奉請(関東)と四奉請(関西)をお選び下さい。() 三奉請 () 四奉請

写詠歌(5枚10組入り) 頒価:5,000円 セット

※送料、消費税は頒価に含みます。同封の請求書でお支払い下さい。

※お届けまで 2 週間ほどかかります。

※ 写仏と写詠歌は 1 組からでも注文できます。詳細はお問い合わせ下さい。

《お申し込みは本頁をコピー、ご記入の上、当会へご注文下さい》

法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

FAX : 03 3578 7036 Mail : hounen@jodo.ne.jp

TEL : 03 3578 6947

疫病退散を願ひ

仏さまを 写しましょう

当会オリジナルの「写シリーズ」に
写仏が新登場。ゆっくりした時間のなか、
ご自宅で仏さまや法然上人のお姿
をなぞって心を通わせましょう。



【写仏】6枚1セット

阿弥陀如来

観音菩薩

勢至菩薩

薬師如来

地蔵菩薩

法然上人

※
お申し込みは
裏面へ

法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4 明照会館 4 階
お問い合わせは FAX またはメールでお願い致します。

FAX : 03 3578 7036 Mail : hounen@jodo.ne.jp

TEL : 03 3578 6947